

第2回 『構想の死角』

(通算22回)

2004.10.21

今回のタイトルは『構想の死角』です。

辞書で調べてみると

構想：「物事の全体の内容や実現する方法についての考えの組み立て」

死角：「見通しのきかない角度」

とあります。

我々の身体に起こる諸事について考える場合、様々な要素をpick upし考えを組み立てることは無くてはならないもの。「こうなっているからこういう結果」「これが原因でこの症状」「だからこういう対処」、それが「構想」です。漢方診療においてももちろん同様、構想がなければ対処はできません。それではその構想に死角があるとすればどこにあるのか…。

東洋医学の基本的ソフトのひとつ「気血水」。この三要素が我々にとって重要だからこそ身体の異常について原因を究明するためのソフトとしてあげられているわけですが、そのなかの水。いったい我々の身体にとってどのような影響を与え何をしているのでしょうか。

人体の約60%は水、細胞のなんと80%は水分と言われます。この水が生体の恒常性維持において重要な鍵を握っていないはずありません。そもそも何で我々の身体にはそんなに水分が多いのか…。生体の恒常性維持、これを東洋医学的に表現すれば「中庸を保つ」となります。これほどまでに多くの水からなる我々の身体、きっと中庸を保つために水は何か大きな影響を与えているに違いありません。

本日は「漢方薬がどのようにつくられてきたか」の道筋を追うことにより「処方」とそれを構成する「生薬」の関係について触れるところからスタートします。そしてそこから「水」に関する「構想」、そしてその「死角」についても。

知識を超えて思考の世界へ。どうぞ本日もわれわれがご用意いたしました診察室へお出かけください。

さあ、今日も漢方診療のはじまり、はじまり。

【本日のkeyとなる生薬】

茯苓 蒼朮 あるいは 白朮 沢瀉
猪苓 麻黄 黄耆 半夏

それぞれの生薬から『思いつく処方』をご想像ください。その処方の目的はどこにあり、そしてどのような「構想」がそこに展開されるのでしょうか。

【本日の内容について、ご確認ください】

【麻黄】

麻黄湯：麻黄、桂枝、杏仁、甘草

越婢加朮湯：麻黄、石膏、蒼朮、生姜、大棗、甘草

【黄耆】

防己黄耆湯：防己、黄耆、蒼朮、生姜、大棗、甘草

【茯苓】

五苓散：桂枝、茯苓、蒼朮、沢瀉、猪苓

【半夏】

半夏瀉心湯：半夏、乾姜、人参、黄芩、黄连、大棗、甘草

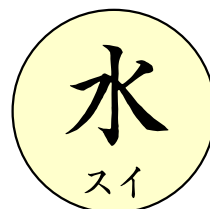
麦門冬湯：半夏、麦門冬、大棗、粳米、人参、甘草

ポイント

■「水」と「寒熱」

今回からご参加の先生方へ

東洋医学には人の身体の状態を把握するためにいくつかのソフトが用意されています。
そのなかの基本的なもののひとつとして



という三要素から考える方法があります。

「気」とは目に見えないが自然界に（もちろん私たち人間にも）存在するエネルギーのこと。後述の血や水もこの気ので運行されています。だから気が不調になれば血や水の変調にもつながります。気の異常は基本的には「気虚」「気鬱」「気逆」という病態に分類されます。

「血」とはまさに血(ち)のこと。体中に栄養を配り、損傷された部分の補修に携わったり健全な状態を保ったりするのに不可欠な養分を運んでいます。この血の異常には「瘀血」と「血虚」があります。前者は「鬱血」、後者は「血の循環障害」のこと。

「水」とは身体の中の水(みず)のこと。当然のことながら我々の身体に不可欠な要素ですが、血とはまた違った意味で重要なものです。水が身体の中で偏在することを「水毒」と表現します。そしてその解決方法を利水と呼びます。

様々な身体の不調の原因がこれら気血水の変調によって説明される場合があります（決して全ての疾患や病態を説明する、という意味ではありません）。

一例を挙げれば、褥瘡。これは血によって運ばれるべき栄養素の供給が不十分なため引き起こされる病態。これを東洋医学的では「血虚」と表現し「補血」で解決しようと考えます。

本日の題名は『構想の死角』です。気血水における構想とは「むくんでいるのに口が渇くのは水の偏在が起こっているということ、だから利水をすれば良い」「眠れないのは気鬱が原因、だから気を晴らせばよい」などと考えるということです。決して「汗は水、だから多汗は水毒」と考えるということではありません。何故かと言えば、多汗は結果であって原因ではないからです。

「構想」とは原因を探り対処を考えること、そして「構想の死角」は原因と結果を混同することから生ずるもの、とお考えください。さらに、「処方名から適応を考える」という「構想」の方法には常に「死角」が付きまとうということも。